

## 講演4

# 「教科と連携をとって推進される総合的なキャリア教育を目指して」

広島県立呉三津田高等学校・教諭 牧野亮

今日はよろしくお願いします。まずお断りしないといけないのは、これから報告させていただく内容は、自分自身で取り組んできたものではないことです。これまで作り上げてきた教員が今年4月の人事異動で転勤し、私は本校2年目です。ですから、転勤した教員や残っている教員からいろいろお聞きしたことを自分なりにまとめて報告させていただく形になると思います。不十分な部分もあると思うのですが、その点はまた最後の質問でお聞きいただければと思います。

それではまず、本校の概要についてご報告します。呉市という町はご存じの方もいると思うのですが、広島市から30キロくらい離れたところにあり、JRでは30分程度で行ける町です。戦艦大和を生んだ造船の町ということでも有名ですが、産業構造が変化するなかで人口も減り、昼間歩くとお年寄りの姿が目立つ町。また、広島市との交通の便がよくなりましたので、広島市のベッドタウン化が進んでいる町です。また市内にはたくさんの島嶼部があります。そのため、都会の生徒と比べたら素直で純朴な生徒も多いようです。

学校規模で言いますと、普通科6クラスです。そのうちの1クラスは普通科理数コースとなっています。平成10年頃まで、呉地区の総合選抜3校の1つだったのですが、総合選抜が廃止され単独選抜となってからは、今まで以上に進学指導に力をいれて頑張っている。

また、一昨年が創立100周年でした。旧制の呉一中ということで、地域からの期待も大きい。保護者の方も地域の方も暖かく「呉三津田高校頑張れ」と見つめていただいている、そんな学校だと考えていただければと思います。

ここから本題に入ります。パワーポイントを用意しようと思ったのですが結局間に合わなかったので、お手持ちのレジメを中心に話を進めさせていただきます。

まず高校におけるキャリア教育についてです。最初にキャリア教育の文字が出てきたのが平成11年の中教審答申だったと思います。今では文科省や広島県の教育委員会のホームページを開くとキャリア教育が1つの大きな項目としてあげられ、さまざまな事業が進められています。自分の記憶では、平成10年代の後半くらいから特に拍車がかかったかなという気がしています。

また、平成11年は、高校現場でもう一つ新しい変化があった年でした。現行の学習指導要領が告示された年にあたります。開始は小中高でずれるのですが、高校の場合は平成15年から学年進行で変わっていききました。

ゆとり教育や生きる力を強調し、キャリア教育の核のように言われた総合的な学習の時間の導入が全校で求められたのも、この指導要領からです。ですから学校現場としては、今までにない大きい変化、教科と特別活動の二つの分野をやっておればよかったところに、第三の領域として、総合的な学習の時間というものが誕生し、それも進めないといけない。その動きが始まったのも平成11年からでした。

広島県はこの新しい流れについて早くから対応がなされていたようです。その大きい原因は、文部省による、まだ当時文部省だったのですが、是正指導が平成10年に入ったことです。政治的な部分や他の活動団体の

意向などが学校現場に入り込み、学校教育が不当に歪められている、そのことが国レベルも取り上げられ、是正指導が入ってきました。これ以降、広島県の教育は非常に大きく変わっていきます。本当に、自分自身でも、がらっと様子が変わったことを実感しています。

例えば、この夏休みに入る時期でいいますと、短縮授業がありました、午前中で授業が終わる日が1週間余りありました。終業式・始業式の日には授業なしです。休み中の補習もそれほど多くしていませんでした。また職員会議が決定機関です。校長の意向に関係なく、提案が職員会議でいくらかでも引っ繰り返っていく。そんな状況だったのですが、それが大きく変化して、今では文科省が出す方針を最初に東京都と争って推進していく県に変わってしまいました。

この是正指導で何が基準になるかという、やはり法的な部分です。法的な裏づけに基づいて全て行動していけないといけない。ですから、新しく出てきた学習指導要領、その取組みも他県以上に積極的に推し進められていったのだと思います。

それから広島県が新しい流れに早く対応していったもう1つの理由は、総合学科の存在です。私も3年前まで総合学科に5年間在籍したのですが、広島県はその設置数が非常に多い県です。平成12～13年頃には、全国で200校余り、現在はもっと増えているだろうと思います。全国初の設置が平成6年。その翌年に広島県初の総合学科校が誕生しました。高陽東高校です。私の前任校でした。そして翌年にもう1校増え、平成10年の是正指導の段階では13校にもなりました。まだ全く設置されていない県もあった時期です。

これがなぜ影響するかというと、第三の学科として登場してきた総合学科。普通科と専門学科に次ぐ第三の学科として登場してきた総合学科。従来は中学時に卒業後の進路を考え、普通科か専門学科に行くのですが、入ったら思っていた高校とはだいぶ様子が違う。こんなはずではなかった。その結果が、荒れる学校の一因を作っているのではないか。そうした問題点への対応などから、高校入学後でも将来を考え、多様な進路目標に対応できる授業科目を準備した総合学科が誕生しました。高校入学後でも将来を考えることができ、それにみあったさまざまな授業内容も準備される。それが総合学科の長所だったと思います。総合学科では、将来に対する見通しが必ず必要となります。ですから1年次に「産業社会と人間」という授業科目が2単位の必修科目として課されました。また興味関心に基づいて学習内容を深めるための課題研究、これも高陽東の場合は2単位だったのですが、3年生で設置していました。こうした将来のことを考え、生き方やあり方を考えていく取組みが、総合学科の「産業社会と人間」でなされていく。学習内容に深みを求めていく取組みも、課題研究の中でなされていく。これらの取組みの成果があったからこそ、広島県では、総合的な学習の時間が普通科にも早い段階から導入されていったのだと思います。総合学科13校の、生き方やあり方を考える「産業社会と人間」中心の取組みがあり、県内でも交流の場があったので、総合的な学習の時間のモデルになるようなものがスタート段階にはすでに存在していたと思ってください。それらをふまえ、普通科でも改革が始まっていくようになります。

さて、ここからが本校の取組みになるのですが、その1つの契機となったのが、県が立ち上げていた学力向上対策支援事業です。当初の対象校は13校、2年目には20校に増えました。現在も拠点校5校、重点校15校の2グループで継続しています。呉三津田高校は拠点校のうちの1校です。当初は200万くらいの予算がつき、学校の自由裁量も大きいものでした。それを利用して講演会や学校視察などの取組みを積極的に行い、学んだことを指定以外の学校にも還元していく。年度末には県主催で合同の成果発表会があり、それと別に学校単位でも成果発表会の開催が義務づけられていました。

週休2日制が始まったのも新しい学習指導要領の頃だったと思います。そうした中、とにかく、まず授業時

間数を確保しなければならないということで、7 限授業や補習を増やし、始業式・終業式の前後も時間割を組むことなどが始まりました。他県では珍しくないことかもしれませんが、苦しみながらも従来のしくみを変えることが始まったようです。

しかし、アンケートを取ってみると、その成果が十分に保護者や生徒に認められていない。このことが、本校が変化するきっかけになっていきます。実際に、事業を始めても 2~3 年ですぐに偏差値というのは跳ね上がるわけではありません。一生懸命勉強しても、授業時間数が増えても、宿題などが増えても、なかなか思うように成果が上がっていかない。「勉強は何のためにするのだ」と考える生徒も増えたのだらうと思います。その声が本校を変える大きな要因となりました。

また、もう1つの要因が、教科を中心とした大学との連携授業です。これも県の指定事業でした。これは、単なる出張授業ではなく、実際に学習内容面まで踏み込んだ内容のもので、国語科を中心になされたようです。この中で大学側が求める学力というのが、到達のレベル、つまり学んだ力から言うのではなく、将来成長が予測できる潜在的な資質、学ぶ力を重視するように変化している。単に現在の知識量だけでなく、思考力・意欲・表現力など見えにくい学力の部分も求めてきているということを強く意識するようになったようです。それまでにおいても分かっていたつもりなのですが、実際に大学側との話の中で、本当に求める気持ちの強さが分かかってきたようです。

それを踏まえ、ちょっと作戦を練り直さないといけない、力づくで偏差値を上げるために一生懸命頑張るというやり方を考え直さないといけないと思うようになりました。そのことを中心になって考える組織として誕生したのが、平成 13 年から誕生した教育研究部という分掌です。ちょっと大仰な名前ですが、新しい変化に対応するため、この時期に県内の多くの学校で設置が進みました。従来からある進路指導部や教務部とかでは、なかなか対応ができないからです。特に、総合的な学習の時間が始まるのでそれへの対応。また広報関係やさまざまな状況分析、アンケート等もこの範囲に入りますが、それらを担当する係となっていきます。

現在、本校の教育研究部は 9 名です。60 人弱の職員の中で 9 名。割と大きい部です。ここが中心となって「学力観の再考」が進められ、その結果、校内で定義されたのがレジюмеにあるものになります。

「平日なら 3 時間は勉強しなさいよ」という学習時間の部分。それから学習方法の部分。従来でいいますと、ここまでだったのですが、それに加えて学習動機の部分。それからメタ認知による自己認識の進化。自分を見つめる自分といいますか自己評価といいますか、現在の状況を冷静に把握する自分といいますか、そういった2つに注目しようという意識が校内で広がるようになります。

これが、生徒に「やればできるんだ」と実感させるのに役立ったようです。学習動機については、当時は福岡県立城南高校のドリカムプランなど、学習動機を大切にする進路指導が唱えられていました。それを参考にした部分もあるかもしれません。しかし、本校で学習動機を重視した1つの背景には、例えば一生懸命頑張ってもすぐには偏差値というのはなかなか上がっていかない。なかなか成績が伸びないから自信を失ってやる気をなくしてしまう。そういう生徒への対応もあったようです。まず学習動機を定めることによって、「なりたい自分」を自覚させる。その「なりたい自分」が見えてくると、「現在の自分がどうか」というのも見えてくる。この両者が見えると、その2つを「近づけていきたい」という気持ちが生まれる。「なりたい自分」を学習動機として、将来の自分をはっきりさせることで、「現在の状況がどうか」という「今の自分」も見えてくる。その2つが見えてくると、初めて「それをもっと縮めていこう」「それに近づけていこう」という気持ちが高まってくる。もちろん、成績面でそれに向けて努力するというのが大きい柱です。しかし、それ以外の面でも、将来こういう職業に就きたいのであれば、こんな点を資質として持たないといけないのではないかな。これを勉強したいのなら、学校の勉強と合わせて自

分自身でこんなことを調べていけばいいのではないかと。そういった「新しい動き」が生まれてくる。偏差値の数値以外のところで自分はこれだけ頑張った、自分はこれだけ資料を集めてやっているのだ、それが自信になって出てくると思うのです。

数値だけの見方を抜け出し、偏差値以外のところで、「こんなに自分が頑張っている」ことを生徒がはっきり実感できるようにする。そのあたりに、この学習動機とメタ認知を加えた部分の成果があるのかなと思っています。

また、この「なりたい自分」と「現在の自分」、これは友達同士や先生に対しても語るができる部分です。ですから、それを共有することによって、お互いに高めあっていく。集団でお互いに励まし頑張っていく。支えあっていく。本校では、生徒が集団で学習しています。朝早く登校できる生徒は、できるだけ早く来て自学自習をしようとか、放課後も自習室に残って友達同士で勉強しようとか。そうした点にも力を入れているのですが、その励ましあうことを促す材料にもなっていくと思っています。

そうした新しい学力観を学校全体で共通認識として持ち、それを授業にも活かすために、提示されたのが、レジュメの「授業改善の指針」でした。

「①学習動機として、『将来の自分の可能性を広げるために学ぶ』という発想を持たせる。」「②学ぶことの意義を明確に意識させ、知識が生きて働く実感を味あわせる。」「③推測や仮説形成を大切に、思考力を働かせながら学ぶ。」「④生徒自身の自己評価力を育てる。」「⑤自己表現力、問題解決能力を向上させる。」の5項目がスタート段階のものです。

どれももっともであり、身につけてもらいたいことなのですが、これを実際にクリアできる授業をつくることは、けっこうきついことです。また、すぐに動きが取れるというわけでもありません。そこで、その試行の場所、最初に生徒に実感させる場として注目されたのが、平成 15 年から高等学校で施行が義務付けられた総合的な学習の時間だったようです。本校では前倒しで 14 年度に 1 年生から始まるのですが、それをうまく利用していきこうという話になったようです。

先に述べたように、広島県では総合的な学習の時間に対する取組みが、2～3 年前から各校で進んでいました。これも県の推進事業の一つです。前倒しで行うため、手を早く挙げたところには予算がつく。1 年目には 50 万くらい付きました。2 年目でも 20 数万つきました。ただ、この事業は、現在は消えています。学習指導要領が全面的にスタートする前のことです。この事業にも他校への還元が義務づけられ、報告会なども行われたので、他校の状況も参考にしながら三津田独自のものを目指していったのだと思います。

こうした中で誕生したものが、通称GAYAです。「la gaya scienza a mitsuta」。「三津田ヶ丘の悦ばしき知」の意味です。非常にハイカラな名前ですが、その名称でスタートしました。もう1つの候補がMAP、地図のMAPです。それと比べるとしゃれた名前です。ニーチェの言葉から引っ張ってきているということを知りました。「学ぶことは楽しいのだよ」「学ぶことは将来のことに結びついていくのだよ」という点を意識させる学習にふさわしい名前だと思います。

では、この授業目標は何か。レジュメのある概要をご覧ください。「①生き方、あり方を探求する意欲・態度を育てる。」「②自己表現力の育成。」「③意識を伴った学びができる力を育成する。」の3つです。

時間数は学年ごとに週 1 時間、時間割の中に組み入れています。教材は全部手作り。毎時間にプリントを作成して配り、それらを1つのファイルに綴じこんで学習を重ねていくという形式です。評価もレジュメにある4つの観点です。また、この授業はクラス単位行います。担任と副担任によるチームティーチングです。場合に

よっては、講師をお招きしていく。こうした時には学年や学校全体の行事になっていくという形です。

具体的に3年間で何をやっていくのか。まず1年生では、オリエンテーションのあと最初の大きな取組みが「切り抜き新聞の作成」です。これは、現在の高校生が新聞を読む機会が非常に少ないというアンケート結果から始まったようです。これに関しては、地元の中国新聞社が3~4種類の分野に分けコンクールを催しています。本校では、クラスを6~7人の班に分け、作品を作っています。その班を分けるのも、自分が興味・関心を持つテーマ、現代社会が抱える問題点を扱うテーマごとに分かれていく。その班ごとに、新聞を読ませ、切り抜きを持参させ、それを張り合わせながら、その内容を深めていく調べ作業を行います。そして、そのレイアウトも考えながら一枚の用紙にまとめていくという形のものであります。

夏休みに入る前になりますと、職業も含めての学部学科研究を進めていきます。2学期の中頃くらいから2~3年生に向けての科目選択がありますので、その準備のスタートです。夏休みには地元の広島大学のオープンキャンパスにも全員参加します。また、秋には、大学の先生方による学問紹介もあります。こうした一連の流れをふまえ、最終的に科目選択を行うという流れです。

それから、読書会。従来は、小説等も認め、あまり本の種類に制限をかけなかったようですが、現在では学校が本7~8冊を指定しています。全部新書です。少し背伸びをして、とっつきにくい本にもチャレンジしていく。係が決めた新書から生徒の希望を募っていきます。これも自分の進路、興味・関心に基づき選ぶという形になるので、科目選択にも結びついていくと考えています。1年生では、内容要約や最も印象を受けた箇所を各自で整理します。読書会ですから、それが終わると、また班に分かれていきます。同じ本を選んだ者が集まって、クラス内で班をつくります。その班内で要約したものを読みまわしていく。誰が書いた要約が最もいいのか、どうしてそれがいいのか、それを班内で話し合っていく。最も気に入った部分、印象に残った部分、それについても班内で話をしていきます。そして、話し合った結果をまとめレポートとして提出していく形をとっています。

2学期末から3学期にかけては、ディベートを行います。学年ごとに設定されたテーマについて、クラス内の班対抗で勝敗を競います。昨年度は、「死刑制度の是非」「バイオ燃料の導入の是非」「自転車の歩道通行の是非」など、多くのテーマは『日本の論点』から選びました。これもちょっと背伸びをして、難しい内容から引っ張ってきたものを一生懸命考えさせる。テーマごとに賛否双方の意見が入っているので、それを糸口にして、実際に聞き取り調査や新聞や書籍などの関係資料を集め、ディベートを行っています。その際、テーマごとに講師の方を招いて事前学習会を行います。例えば、「死刑制度」に関しては、広島大学法学部の先生に来ていただきお聞きする。消費税関係の部分でいうと、呉地区関税会の方をお招きする。教員がいくら指導しても限界があるので、そこはその道のプロをお迎えして生徒の理解や興味・関心を深めていくということもやっています。

ところが、一年生でディベートをやった際に、ある問題点が出てきました。一生懸命調べてくるし、頑張っって掲示物も作ったりします。でも、表現が下手なのです。下を向いて原稿を読むだけ。なかなか討論らしいものにならない。その結果、始まった取組みが「詩のボクシング」でした。日本朗読ボクシング協会の楠かつのりさんの全国大会にも参加させていただいている行事です。会場は、本校の体育館であったり、お金にゆとりがあれば市のホールをお借りします。当日はリングに模したものも作り、本物のゴングもボクシング部がある高校からお借りしてやっています。この行事もけっこう盛り上がります。最初はおとなしそうに見える生徒でも、本当に感情を込めて読んでいきますし、放送部の生徒はそれらしく読んでいくし、最後にオチがある作品や言葉遊びを中心としたものとか、いろいろな詩のタイプが出てきて、けっこう面白いものです。

現在は全校行事になっているこの行事も、当初は2年生だけのものでした。今もその名残りで、2年生では

全校大会の前にクラス予選をやります。班対抗で競いクラスを勝ち抜いていく。全校大会には、勝った者が出る場合もありますし、負けた中で表現力が豊かな生徒がいれば、その生徒が出て行きます。他学年以上に2年生に時間を割くのは、1年生のディベートで不十分だった表現力を鍛えるためです。「詩のボクシング」を通じて「表現力っていうのは大切なんだ」「言いたいことを伝えるには、こんなやり方もあるんだ」ということに気づかせる取り組みです。そして、その訓練の成果を活かす場が、2年生3学期に再び行うディベートです。

これは読書会についても同様です。2年生では新書の書評に重点をおきます。各生徒が書いた書評を、クラスをこえた班で討論します。1年生では要約と感想が中心でした。前年以上に論旨を読み取る力を求めています。そのため新聞などに掲載される書評を夏休み中に集めさせたりします。こうした取り組みも3学期のディベートの立論を活かそうとしています。

また、2年生では修学旅行に際して班別自主研修をやります。最近では北海道に行っていますが、札幌を起点に班ごとに行動をまかせ、それに関する調査もさせています。

3年生については、まだ本校2年目ということで理解できていない点が多いのですが、いちばんの特色はパネルディスカッションだと思っています。ディベートの延長として、また高校から社会人になっていくことをふまえたテーマを掲げ、個人・クラスで検討したうえで学年全体でのパネルディスカッションを行います。テーマに即した外部講師もお招きして行います。生意気にも高校生が講師の方とともにパネラーとしてならび討論を進めることで、より広い世界や多様な視点に気づいていくことを期待する取り組みです。そうした取り組みの最後に、高校生活のまとめとして「いかによく生きるか」というテーマで小論文を書かせます。1学期の「社会への参画」、2学期の「パネルディスカッション」以外に「保護者への感謝の気持ち」「85歳まで生きた時の言葉」など4テーマで書いてきたものを仕上げしていく作業です。大学進学が中心の本校ですが、高校卒業後の「自立」ということを強く意識させての働きかけです。センター試験も大人になるための通過儀礼として位置づけ、全員受験を原則にしています。

次にこうしたGAYAを実行する上で、教員が心がけてきた点ですが、これはレジュメの(3)に7つあげています。

最初の「教科学習とGAYAの還流性」は、本校2年目の私からすると、やや見えにくくなっている気がします。これは先に述べた「授業改善の指針」を実現させる糸口としてGAYAがスタートしたことを考えると、その還流性を高めることは大きな課題で、この点についてはあとで述べさせていただきます。

2番目の「視野の拡大を目指す体験活動」について。これは、「同じグループで群れる」「自分に都合のいいようにしか考えることができない」という生徒に対し、いろいろな面で刺激を与えていこう。目的もはっきりさせた行事を作っていこうということです。その典型例が、キャリアモデルとの出会いです。伝統校であることが、本校では非常に役立っています。OBの方が非常に快く請け負っていただけます。平成17年から19年まで総合的学習時間に関する文科省のモデル事業に指定され、多少は講師代などもあったのですが、それも終了しました。講師を招くためには生徒からお金を集めることになるのですが、それにも限界があります。OBの方にお願いすると、謝金なしで請け負っていただけることも多いので非常に助かっています。逆に言えば、そうした講師の方を探してお願いしているのが現状です。例えば自動車会社のマツダが広島市にあるのですが、そうした企業にも協力していただいています。創立100周年の際には「無限の扉」という冊子を作り、OBの方に自分の経験談などを書いていただきました。それを教材として利用していく。さらにホームページ上には、「100年のキャリアアドバイス」として体験談を掲示させていただく。本当に伝統校のありがたいところだと思っています。

3番目は「活動に拡散と収斂の課程を取り入れる」です。これを前面に出している点は、面白い発想だと思

っています。「単に知ってそれに納得」という形でなく、「情報が入る、それを自分なりに考える、考えていった結果を例えば班毎に班内で発表して話し合う、そしてまた新しい視点から考え直して、また表現しなおしていく」流れです。この課程を必ずどの取組みにも取り入れ、思考力を豊かにしていく。プリント教材の作成においてもこのことを心がけています。

4番目は「選択の重視」です。自分の興味・関心の所在を、その都度に確認していくものです。先ほどから「班ごとに」ということを何度かあげてきましたが、これらの班は全部違うものです。行事ごとに、自分は何に興味を持っているかを確認させ、そのテーマごとに選ばせて班を作っていきます。ですから、話し合う場でも、まあクラスの中では知っているかもしれませんが、2年生になって学年を超えた班では、あまり話をしないような生徒とも話す機会が生じてきます。仲良しで、よく話をする人間だけではなく、あまりなじみがない生徒とも話していく。しかし、そのテーマは自分の興味・関心に基づいて選んだものですから、共通項というのは存在する。それを元にして、話し合いのルールであるとか、他人を意識するであるとか、そういったことを進めていく。このあたりにも「前任者は工夫しているのだな」と感じています。

「選択」に関しては、例えば科目選択において、まず、「切り抜き新聞」で自分は現代社会の問題点の何が気になるのかを考えていきます。それから「学部・学科調査」でも、最終的には個人ごとに調べたものを冊子にしていくのですが、それを作り、他の生徒のまとめを読むことでまた考える。広島大学のオープンキャンパス参加、これもどこにいかうか考える。それから出張講義の学問探訪ですね、これも考えさせていく。そういった長い課程の中で、何度も選択する材料を積み重ねていった結果として、最終的な科目選択にたどり着いていくという流れになっています。

5番目は「自己評価」です。メタ認知ということを経験する以上は、自己評価、これをいろいろな機会を通じて習慣づけようとしています。例えば、毎時間のGAYAプリントには、1枚目に目的を載せています。授業後に、必ずその目的がちゃんと達成できたかどうかを確認する。「よく出来た」「まあまあ」「もう一歩」「できなかった」とかの簡単なものですが、それをチェックするようにさせています。例えば、詩のボクシングに向け、「詩を準備しなければならぬ」「その詩について話し合いをする」という時には、「きちんと詩を持ってきたか」「話し合いに積極的に加わったか」「その話し合いを通じて自分は得るものがあつたか」などを確認させています。そういう習慣をGAYAで身につけさせ、それを授業などにも応用させていく。そうしたことも期待しています。もちろん学期末には、それらをまとめた形で自己評価を行い、通知表で保護者にも届くようになっています。

6番目は「競い合う、高めあう」です。とにかく行事が終わるたびに文章を書かせます。本校は文章をよく書かせる学校です。ホームルーム日誌というのがあるのですが、本校ではA4サイズの表に時間割や連絡事項を書いたうえで、さらに裏全部が自由記述になっています。罫線もけっこう密に入っています。特に入学当初は日誌にも苦勞していたようです。それに加え、行事ごとにも必ず文章を書かせています。例えばディベートのあと、自分の主張した部分をまとめて文章化していく。それを、県の「言葉の輝き」というコンクールがあるのですが、そこに出席してうまくいけば賞をいただく。また、切り抜き新聞も新聞社にも応募するのと別に、文化祭で展示・投票してもらい、優秀チームには賞状を出す。トロフィーもあつた気がします。ただ単に「やらないといけないからやる」というのではなく、「やったら面白い」と感じるためのご褒美もいろいろ入れてやっています。

最後は「活動の連動による高次元への発展」です。これは先に述べたとおりです。読書会を例にしても、2年生では中身を深めていくし、他の取組みとも連動させていくということです。

これらの項目を整理しながら気が付いたのは、「理論・理屈」を教え込むのではなく、技能。例えばコミュニケーション能力を高めるような技能。文章を書くための技能。話し合うための技能。そういった技能面を学習に取り込んでいることです。一般の総合学習では、「職業や学部・学科調べを行い、将来に向けて興味・関心のあ

る事項を見出し、その情報を集め、学習も深めてみましょう」という形が多いのですが、実際に社会が求める技能、それをできるだけGAYAの中で訓練していく、トレーニングしていく。そうした中身を比較的多く含んでいるのかなということ、このレジユメを作りながら感じました。

本日のフォーラムでのお話を聞いていますと、キャリア教育等に結びつく取り組み、高校の場合はどうしても総合的な学習の時間が中心になっていくのですが、それが「なかなか全体のものにならない、一部の係だけのものになってしまう、それを広げるためにどうしたらよいか」ということがあるようです。小中高の場合、この点は、受け入れられやすい要素があるのかなと思いました。

例えば呉三津田高校では「キャリア教育全体像」(資料①)というものがあります。タイトルそのものに「キャリア教育」という言葉が入っています。「キャリア教育」という言葉は特別な言葉であるように聞くのですが、最近では「社会人になるための普通の指導をすることがキャリア教育だろうな」と思っています。ホームルームがあって、クラブ活動もあって、それらが日常的にある高校までの現場では、至るところでそうした指導が行いやすく、大学とは基本的に異なっています。

本校は本当に面倒見がいい教員が多いようです。ちょっと気になる生徒がいれば、担任はもちろん、学年主任や教科担当の教員も生徒を呼んで指導していきます。クラブ活動での指導もそうです。模擬試験を返す時も必ず面接です。だから担任をするとちょっと辛く、また返さないと憂鬱になることもあります。しんどい部分もありますが、そうした指導がしやすい状況が基本的に高校現場にはあるのだらうと思います。

総合的な学習の時間の推進については、レジユメの 4 ページにお戻りください。基本的には学年会が中心です。教育研究部のメンバーが学年ごとについて、部で立案したものを月曜日の午後にある学年会で検討し、それに基づいて担任と副担任が授業を進めていきます。毎回授業案を作るのは、けっこうしんどいことです。街なかを休日に歩いても、GAYAと似た名前の車を見ると、授業のことを思い出して「あー、やらなければ」と感じてしまうのです。まあ、そうした面もありますが、とにかくお願いして進めていますので頑張らねばならないし、学年会のメンバーも全員でやらないといけないシステムが、すでにできあがっています。

それから、他の分掌との関係で言うと、やはり最も関係が深いのは進路指導部です。はじめは、総合学習の導入により3年間で3時間も教科指導の時間が取られてしまうことへの抵抗感は、進路指導部でも大きかったと思います。これは教務部についても同じだと思います。それでも、しだいにGAYAの中身がはっきりして、その内容がある程度生徒の学習意欲を高めていくことが見えてくると、提携して取り組んでいこうという形が進み、資料②にあるような進路学習マニュアルが完成していきました。

学期に2~3回、定期考査の成績を郵送する時や懇談会で配る資料に学年便りがあるのですが、学年主任は、このマニュアルの項目をピックアップして学年便りを作っています。時期に応じたテーマで保護者に情報を伝え、参考にしていただくものです。資料③を見ていただくと、一部の係だけでなく、進路指導部も教務部も教科も協力して頑張っていくことが出ています。高校現場では、少なくとも本校においては、一部の係だけでなく学校全体でやろうという形ができあがっています。

しかし、「本当に一緒にやってもいいな」と思うようになるために必要なことは、やはり結果です。他の分掌に対して教育研究部が「やれば効果が出るのだ」ということを示したのが資料④の小論文模試の結果です。いろいろな話を知る、幅広い視点から物事を考える、文章をたくさん書かず、そういった訓練の結果が出た数値で、その結果を見て進路指導部の反応が変わったそうです。現在の3年生も、1年生の時が86人、それが2年生で128人にまで増えています。回りを説得するためには、やはり「GAYAで学んだ力がこんな形になって現れ

る」という具体的なデータが必要だと思っています。

それから、いちばん中心に話してほしいといわれていた教科指導との関わりですが、これはなかなか難しいところですよ。また4ページにお戻りください。小路口真理美教諭、彼女は今年4月に教頭に昇格して転勤したのですが、この方がこのGAYAを中心になって作ったメンバーの一人です。国語科において、GAYAと教科との関係を整理されています。その整理した図が資料⑤です。両者を「言葉の教育」という形で捉えられているようです。「言葉の教育」でまとめ、それをGAYAで鍛えていく部分、教科の国語等で鍛えていく部分に整理し、教材選び等も進めておられるようです。指導案をいくつか見せていただいたのですが、例えば、現代社会とのつながりを意識した形で古文・漢文の指導を行っています。儒教の「仁」、孔子や孟子の「仁」に関する漢文をやるときには、まず現代社会の特徴を整理するようです。強い者が勝つ、勝ったものだけが賞賛されていくようなちょっと冷たいような部分、ストレス等の多さから逃れるためには、自律的な部分を捨て他律的に生きる方が楽だと考える生徒が出てくる社会、そういった現代社会の側面を整理したうえで、それでは、その現代社会を「仁」の考え方でいけばどんな解釈ができるのかと考えさせる。現代社会と古文・漢文の世界を照らし合わせていくといえますか。現代社会の視点から古文・漢文を見るし、古文・漢文の世界から現代社会の様子を考えさせていく取組みのようです。また、そのことに加え、現代社会でも積極的にボランティア活動等に取り組んでおられる方の文章、それを追加していく。そうした材料をいろいろ提示した上で、「あなたは社会に対してどういう考え方を持っているのか」と問っていく。とにかく、古文なら古文、漢文なら漢文だけで終わるのでなく、常に現代社会と照らし合わせながら、学校現場と社会を結びつけながら考えていくことをめざしておられるようです。

また、漢文と英語の教科横断授業も行っています。例えば、漢文では主語がない場合も多い。その時に、もし英語で言えば主語は何になるのか。さらに「すべからく〜べし」と読む再読文字がありますね。こうした再読文字は、英語で言うと助動詞は何なのか。「〜なかれ」という禁止形の場合、そのまま命令形にしているのか。特に「〜なかれ」の訳では禁止形を取るのか、呼びかけの形を取るのかを考えさせ、そのことを通して周りの人間に物事を呼びかけて納得してもらい、心を開いてもらう際にはどういう表現がいいのか、といったことにまで結び付けていく。文章づくりに心がけないといけない部分を、そういった横断授業の中で考えさせていく、そんなことも実践されてきたようです。

では、今こうしてお伝えしている自分は何をやっているかということ、この2年間で、ほとんど何もできていません。ただ、断片的なことではあります。自分は日本史が専門なのですが、去年は1年生の担任だったので現代社会の授業も受け持ちました。GAYAの最初は切り抜き新聞です。現代社会の授業でも、その導入は世界の諸課題で、浅く広く世界の課題を見ていくことから始まります。その双方を結びつけるように指導をしていく。また今年は、2年生の世界史Aも助っ人としてやっているのですが、これは使えるなと思ったのがアメリカの独立戦争。はじめ勝ち目なくて、戦争に参加する人数も少なかったアメリカ。戦いに勝つためには国内をまとめないといけない、外国からの支援も得ないといけない。そういった時に、トマス・ペインが頑張っていく、ジェファソンが独立宣言を出して「自分たちが勝ったらこんなに美しい世界ができていくんだ、だから協力してほしい」と訴えていく。フランクリンもフランスのサロンで一生懸命訴えていく。そうしたコミュニケーション能力の高さやプレゼンの強さがアメリカの独立にまで結びついていく。「だからGAYAは大切なんだよ」と「詩のボクシング」に関連づけて生徒に訴えていく。そうした程度なのですが、3年間の流れというものがある程度見えてくると、それを意識して各々の授業の中で工夫できる部分も広がっていくのだろうと考えています。

では、最後に「現在の課題」は何か。最後までどうまとめようか迷ってしまい、レジュメも空欄のままになってしまいました。

1つは、やはりGAYAと授業との関わりです。この整理は必要だと思います。両者は、やはり連動していかないといけない。文科省のモデル事業の報告書にも、これがなかなか進まないことを課題としてあげています。しかし、個人的な思いで言うと、各教科・科目の中で、先生方はやっておられると思っています。自分の推測範囲ですが、本校では難関大学といわれる学校への進学者数が増えています。国公立大学の合格者数を増やすことが1つの大きな目標で60%前後まで進みました。それと並行して難関大学に進む生徒も増えています。特にこの数年でその傾向が高まっているのですが、その対応には、やはり授業に深みを作っていない。そうしないと、二次試験に対応できないし、これも指導が求められる推薦入試やAO入試にも対応できない。だから、どの教科・科目についても「授業改善の指針」にある項目やGAYAと共通する実践が行われていると思うのです。ただ、その整理が遅れているだけではないかと思っています。「GAYAとの連携はこうあるべきだ」と構えて整理するのではなく、現在の難関大学向けの指導や推薦入試・AO入試向けの指導をうまく吸い上げていく。そこから入っていけばいいのかなと考えています。

2点目は、GAYAの形骸化です。平成14年からスタートして16年までの3年間でマニュアルができあがりました。しかし、どうしてもその弊害でマニュアルに頼りきってしまうことが出てきます。去年、自分が1年生の担任としてGAYAの授業をした際にも、やりにくい部分、理解しにくい部分がありました。今年度は、2年生担当として自分自身が「詩のボクシング」の指導案を作っているのですが難しさを他々感じています。表現の工夫はいろいろとありました。それなりに盛り上がりました。でも何か欠けているのです。それは何かというと、やはり、本当に詩で訴えたいものが見えにくいことです。元にある、これを訴えたいからこんな表現や文章が出てくる、その一番根本の部分が欠けてしまっている。技巧に走るだけで中身が乏しい。そんな面が出てきている。それはなぜ起こるか考えると、やはり形骸化が関係しているのかなとも思っています。本来のGAYAの趣旨が見えにくくなっている。私自身が2年目でこの場に立って説明するというのも1つの表れかもしれないのですが、やはり核になって動く教員が十分に育っていない。スーパースターらがいなくなると大きな不安が生じてしまう。この4月にそのことが特に顕著となったので、その整理も進んでいないことが最も大きな課題だと感じています。

今回のまとめが、こうした状況の打開に少しでもつながれば幸いです。そういう思いから今回の仕事を引き受けました。

以上です。ありがとうございました。